

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院学生研究
2025年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 文学研究科 比較文明学専攻		
研究代表者 (2026年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年	氏 名	
	☒ 博士前期課程 2 年 ☐ 博士後期課程 年	橋本侑樹	
指導教員	所属部局・職名	氏 名	
	文学部・教授	渡名喜庸哲	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	J. ラカンにおける K. マルクスの理論的影響と資本主義下の主体の精神性に関する研究		
研究組織 (共同研究者が いる場合のみ、 2026年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏 名	
研究期間	2025 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 198,946 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。 本研究は、資本主義における主体の精神性を明らかにすることを目的とし、ジャック・ラカンとカール・マルクスの理論的接点を構造概念の同型性に着目して検討するものである。従来、両者の接続はしばしば諸概念の機能的類似性を根拠にして試みられてきたが、本研究では、ラカンとマルクスの理論における構造の同型性に依拠することで主体の精神性の枠組みを理論化することを目指す。具体的には、(1)ラカンの構造概念の理論的変遷を検討してマルクスからの影響の実態を明らかにし、(2)ラカンとマルクスにおける構造の同型性を検証し、(3)それに基づきラカンの理論を『資本論』へと適用することで『資本論』に登場する諸人格の精神性を解明する。
キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
[ジャック・ラカン] [資本主義] [構造]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
- ・自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

研究目的、研究目標

本研究の目的は、資本主義体制下の主体(主に賃労働者と資本家)の精神性(欲望・幻想・無意識などの在り方)を明らかにすることであった。具体的には、以下の目標を設定していた：

(1) 本題の前段階として、ラカンにおける構造概念の理論的変遷を通史的に検討することで、ラカンがマルクス(『資本論』)から影響を受けていたことそれ自体を明らかにする。なかでも、ラカンのキャリアの中期頃にあたる 1960 年代後半から 1970 年代前半を中心に分析する。理由は主に次の 3 つである：この時期のラカンが、(i)マルクスに頻繁に言及していること、(ii)アルチュセール派および彼らによるマルクスの構造主義的読解(特に *Lire le Capital*, 1965)に言及していること、(iii)1968 年の五月革命に対して応答的に言及していること。さらにこの時期には、上記 3 つの外的状況に加えて、ラカンの構造概念が、言語の分節的な諸要素によって構成される象徴界のみならず、そこに回収され得ない享楽などの現実界をも含み持つ概念へと変容していることも確認される。本段階では、こうした理論的変容とマルクスへの接近とが連動していたことを、文献学的・概念史的に明らかにする。また、そのために、当時のラカン(派)の文献のみならず、アルチュセール(派)や五月革命に関する資料を広範に収集し読解する。

(2) 当該時期におけるラカンの構造と、そのときラカンがマルクスに見出していた構造との比較を通じて、両者における構造の対応関係を検討する。なお、ここで構造と呼んでいるものは、具体的には、言語(シニフィアン関係)ー言語の主体ー剰余享楽(欲望の原因を指すラカンの概念)という諸概念の組み合わせによって構成されるラカンの構造と、市場(商品関係)ー賃労働者ー剰余価値という諸概念の組み合わせによって構成されるマルクスの構造のことである。ラカンはこれらが同型であると措定していた。本段階では、より具体的には、ラカンが、自らの構造の構成要素である剰余享楽を剰余価値と相同的であると述べていたことに立脚し、その相同性を検証する。ここで言う相同性とは、例えば人間の手とコウモリの翼のように、2 つの同型の構造において同じ位置を占め、それにより同じ規定性を帯びている要素間の関係性を指す。つまり相同性とは、外見や機能は異なるが成立条件や運動形式は共通する要素間の関係性のことである。本段階では、このような剰余享楽と剰余価値との相同性の検証を通じて、ラカンの構造とマルクスの構造との同型性を明らかにする。また、それによって、それぞれの構造のもうひとつの構成要素である言語の主体と賃労働者も相同的であること、そしてそれゆえに、それらが同じ規定性を帯びていることを明らかにする。この同型性・相同性・規定性が証明し得れば、ラカンの理論がまさに構造的に『資本論』へと適用し得ることも同時に明らかになる。さらにまた、ラカンがマルクスの理論をいかに参照し取り込んだか、その理論的影響の内実も明らかになる。

(3) (2)で得られたラカンの構造とマルクスの構造との同型性に基づき、ラカンの理論(言語との関係において捉えられていた主体の精神性に関する理論)を『資本論』の体系へと適用することで、『資本論』に登場する諸人格の精神性を考察する。諸人格とは、特に賃労働者や資本家、他にも受給貧民やルンペン・プロレタリアート、資本家をより細分化した産業資本家・商業資本家・貨幣資本家などである。ここでは、そうした資本主義的主体の欲望・幻想・無意識などの精神性が、資本主義的生産様式のなかでいかに条件づけられ規定されているかを理論的に考察する。例えば、賃労働者や資本家は何を・なぜ・いかにして欲望するのか、という問いに一定の回答を与える。さらにそこから派生して、賃労働者はなぜ資本主義体制に従い続けるのか、その従属体制を変革する可能性はあるか、あるのであればいかなる理路によってか、という問いにも答える。

研究成果の概要 (つづき)**研究内容**

以上3つの目標を定めていた本研究が具体的な成果としてまとめることができたのは、主として(2)に関する検討であった。

またそれは、計画段階で構造としてまとめていたものを、構造(シニフィアン構造/商品構造)とその構造に規定(構造化)されるもの(主体・剰余享楽/賃労働者・剰余価値)とに分けた上で進められた。これは、後者が、初めからひとつの要素として構造を形成しているのではなく、前者の構造に規定されるかたちで関わっていると判断したためである。

この変更に伴うかたちで、本研究は主に以下の2段階の手順を踏むこととなった: 1. シニフィアン構造(シニフィアン同士の関係)と商品構造(商品同士の関係)の同型性を検証する。2. シニフィアン構造による主体・剰余享楽の構造化と商品構造による賃労働者・剰余価値の構造化の同型性を検証する。

研究結果

結果を簡潔にまとめると以下の通りとなる:

1. 以下4つの点において、両者の構造には同型的な対応関係が認められる。

シニフィアン構造: ①シニフィアンの規定原理としてのシニフィアン同士の差異性、②その帰結としての構造の非完結性(構造を支える要素の欠如)、③シニフィアン自身によるその欠如の指示(S(A))、④この例外的要素による構造の辛うじての成立。

商品構造: ①商品の価値が他商品によって表現される際の商品同士の差異性、②その帰結としての構造の非完結性(統一的に価値を表現する要素の欠如)、③その欠如への商品自身の着座(一般的等価物)、④この例外的要素による構造の辛うじての成立。

2. 以下3つの点において、両者の構造化には同型的な対応関係が認められる。

主体・剰余享楽: ①主体はシニフィアンによって他なるシニフィアンに対して表象される、②シニフィアンの差異性ゆえにその表象は不完全なものとなる、③このとき、シニフィアン構造の欠如(を指示するシニフィアンS(A))とそうした主体における欠如とを巡って剰余享楽が産出される。

賃労働者・剰余価値: ①賃労働者は労働力商品として市場に現れ、その価値が他商品によって表現される(賃労働者は商品(労働力商品)によって他なる商品に対して表象される)、②他商品による価値表現の際、労働力商品の交換価値と使用価値との差ゆえにその表象は不完全なものとなる、③このとき、商品構造の欠如(に置かれる一般的等価物)とそうした賃労働者における欠如とを巡って剰余価値が産出される(正確にはその契機となる)。

なお、以上のうち1.に関して、立教比較文明学会研究大会にて口頭発表を行った(次項参照)。

また、達成できなかった(1), (3)に関しては以下の理由が挙げられる:

(1) 研究の進展に伴い、ラカンの理論的変遷においては、構造ではなく享楽がその中心だとみなす方がより適切であると判断された。その変遷とは、具体的には、(とりわけセミナー7『精神分析の倫理』において)端的に構造の外部にあるものとして立てられた享楽について、それがいかにして構造や主体に作用しているのかを理論化していく過程である。構造概念の変容があるとすればそれはむしろこの過程の関数であり、したがって、この過程に着目する方がラカンの思想変遷およびそのうちのマルクスの影響を理解するうえでより適切であると思われた。これに伴い、別の角度かつ広範な視野でラカン思想を追う必要が生じたため、当初設定した目標は相対化され、そのままのかたちでの達成には至らなかった。しかし、この発見は享楽概念を主題に据えたより大きな研究に繋がる。来年度以降この課題に取り組んでいきたい。

(3) ラカンは、1972年に資本家のディススクールなる概念を提示している。『資本論』に登場する諸人格(主に賃労働者と資本家)の在り方を考察するうえで検討が不可欠であるこの概念について、ラカンはしかし、十分な説明を与えていない。そのため、目標達成の前段階として資本家のディススクールを解明する必要が生じた。この追加の作業により、研究期間内に当初の目標を達成することが困難となった。本目標はこの作業の延長線上に位置づけられる課題であり、引き続きこの手順で研究を進める予定である。

※ この(様式2)に記入の成果の公開を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

④ その他

橋本侑樹「ラカンとマルクスにおける構造の同型性」2025年度立教比較文明学会研究大会、2025年10月4日。